

感染症が引き起こすがん

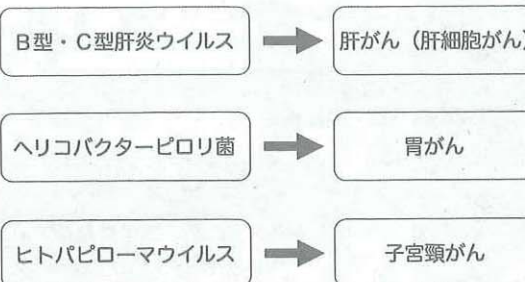
がんには、感染症に起因するものがある。国際がん研究機関による調査では、がん発症例のおよそ6分の1が、予防・治療可能な感染症に起因していたと報告されている。指摘された病原体は、B型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルス、ヘリコバクター・ピロリ菌、ヒトパピローマウイルスである。

B型・C型肝炎ウイルスの感染は、慢性肝炎、肝硬変を経て肝がん（肝細胞がん）の発生につながる可能性がある。ヘリコバクター・ピロリ菌の感染は、慢性胃炎を経て胃がんを発症するおそれがある。ヒトパピロー

マウイルスの感染は、子宮頸がん発症のリスクになる。

これらの感染症に起因するがんの対策とし

ては、まず一次予防が効果的である。つまり、健康的な生活を送りながら危険因子を除去し、病気の発生を抑えること。B型肝炎については、ワクチンの接種により慢性肝炎、肝硬変、肝がんが予防できるとされており、2016年4月1日以降に生ま



れた0歳児への定期接種が10月から始まった。

それから、二次予防も大事である。つまり、病気の早期発見と治療のため、健康診断などを受けること。国立がん研究センターがん予防・検診研究センターは、15年に改訂した「日本人

のためのがん予防法」のなかで、一度は肝炎ウイルス感染検査を受けることに加えて、機会があればピロリ菌感染検査を受けることを推奨している。

B型・C型肝炎ウイルスに感染していることがわかった場合は、専門医に相談して、詳しい検査と薬物治療による肝がんの予防をすることが推奨されている。

ピロリ菌に感染している場合は、胃がんに関係の深い生活習慣に注意し、主治医に相談することが推奨されている。薬物治療により、ピロリ菌を除菌することも可能である。ヒトパピローマウイルスについては、ワクチンはあるが、上記の「日本人



のためのがん予防法」では接種の推奨はされていない。

将来、C型肝炎ウイルスやピロリ菌感染に対するワクチンなどが確立されれば、感染症に対して予防などの対策を施すことで、がんは大幅に予防できる可能性がある。

（大阪大学 村井稔幸）
協力：日本生物工学会

次回は12月21日に掲載